



フー太郎の森基金では、毎年エチオピアへのスタディー・ツアーを実施。参加者と地域の人々が一緒に植林を行う

# PLAYERS

国際協力の担い手たち

## NPO法人フー太郎の森基金 エチオピアで森を育てよう

“フー太郎”の森を復活させたい—。  
そんな思いで始まったNPO法人フー太郎の森基金の活動。  
彼らの支援を通じて植えられた“種”は、  
エチオピアの大地とたくさんの人々の心に芽吹いている。

### ふくろうのすみかを探して

「ずいぶんと緑が増えたなあ」  
昔からこの地を知る人々は、口をそろえてそう言う。エチオピア北部ラスタ郡にあるラリベラ。かつて岩山が連なっていたこの小さな町は、10年の月日をかけて、美しい緑で彩られるようになった。  
「すべては一匹のふくろうとの出会いが始まりました」。そう話すのはNPO法人「フー太郎の森基金」の新妻香織代表。今から17年前、世界遺産に登録されている岩窟教会群を見ようとラリベラを訪れた時に、ある衝撃的な場面に遭遇したという。「子どもたちが茶色のかたまりを投げ合っていて遊んでいたんです。何だろうと思って近寄ってみたら一匹のふくろうでした」。



苗木のポットに使用した紙コップには、ベガルタ仙台のサポーターからのメッセージが。仙台のホームスタジアムでの試合時にエチオピアコーヒーを配り、メッセージを書いてもらった



ラリベラの子どもたちが待ち望んでいたベガルタ仙台のコーチのサッカー教室。みんなの目は真剣そのもの

かつては“森を守る”意識の薄かった住民たちも、今では自主的に植林活動を担う

住んでいた木を切り倒され、母鳥とぐれ、子どもたちの「おもちゃ」になっていたふくろう。新妻さんは彼を「フー太郎」と名付け、森に返そうと森探しの旅に出た。しかし、どこまで行っても森がない。そこで初めて、エチオピアが深刻な森林破壊に直面していることを知る。「木がなければ水も土もなくなってしまう。農民たちも畑が作れず貧しい生活を強いられ、現金収入を得るために木を伐採するという悪循環が発生していたのです」。

エチオピアの赤茶けた大地に、一本でも多くの木を植えたい。新妻さんは、故郷の福島県相馬市を拠点に1998年に「フー太郎の森基金」を設立。ラリベラで植林を中心とした支援活動を開始したが、その中でまず重視したのが「教育」だった。「現地の人がなぜ木が必要なのかを理解しなければ、私たちがいくら植林しても意味がないからです」。そこで、地元の小中学校に「環境クラブ」を組織し、ラリベラの未来を担う子どもたちに種から苗木を作る方法を一から指導。現地の人々と共に、植林活動に励んでいる。

た。さらに、08年から年間50万本の植林を目指したプロジェクトがJICA草の根技術協力事業を通じてスタート。植林や農業の効率性を強化すべく、有機ごみの堆肥化にも取り組んでいる。決して簡単な目標ではないが「住民の意識も能力も高くなっていますし、必ず達成できると思います」と意気込む。

### サッカーを通じて届く心

そしてこの1月、ラリベラでちょっとしたイベントがあった。フー太郎の森基金が拠点を置く東北のサッカーチーム、ベガルタ仙台のコーチによるサッカー教室が開かれたのだ。「いつも子どもたちが楽しそうに古着を丸めたボールを蹴っている姿を見ていて、サッカーを通じて、何かできることがあるのではないかと思っていたんです」と新妻さん。そこで知人のベガルタ仙台事業部運営課の齊藤美和子課長と「ベガルタ仙台のコーチをエチオピアに」プロジェクトを開始。サッカースタジアムでの呼び掛けなどを通じて、2年かけてサポーターなどから派遣資金を集めた。

今回、エチオピアに渡ったのは、ベガルタ仙台ジュニアサッカースクールの井上和徳スタールマスターと福田直人ジュニアコーチ。アフリカの子どもたちを指導するのは初めてだったが、「ちょっとシャイだけど、優しく親切。どこか東北の子どもたちと似ているような気がします」と井上さん。「とにかく身体能力



1994年のラリベラ(左)。フー太郎の森基金の活動と地元の人々の努力により、15年後、その景色は大きく変わった(右)

の高さに驚きました。少し指導するだけで、ボール扱いの巧みさが加わって想像以上に良いプレーが出てくる。指導していて手応えを感じましたし、サッカーの原点を教えてもらったような気がします」と話す。

「これからの10年は、現地の人にとって活動を引き継いでいくかを考えていきたい」と新妻さん。その第一歩として、新たな生計向上の手段を得るため、地元で採れる果実を活用してドライフードの生産工場の建設・運営を支援するプロジェクトが進行中だ。

実は3月11日の東日本大震災で、フー太郎の森基金が拠点を置く相馬市も甚大な被害を受けた。しかし震災から数週間後、新妻さんにこんなうれしいことがあった。「津波で流されてしまった実家の近くを歩いたら、父が描いたフー太郎の絵が出てきたんです。これに勇気づけられてさらに周囲を探していたら、実家の屋根、さらにはアルバムや祖母の葬儀の写真、父の画材などが出てきました。きっと、フー太郎が呼んでくれたんですね」。エチオピアから届いたたくさんのお便りメッセージを胸に、新妻さんは避難所を周って温かいエチオピアコーヒーや家庭料理を提供しているという。

ラリベラでは今日も変わらず、今年植林予定の80万本の苗木がたくましく育っている。この大地でたくさん種が芽吹くことが、これから東北の人たちの復興の力になっていくのかもしれない。